特250
990

大阪府の郷土史

歷史地理趣味の會編

始

特250
990

第一編　大阪府の略史

第一章　上古期

有史以前の大阪府地方の中心地は河内國、國府(コクブ)附近で、近年こゝから數多の石器・人骨等が發掘された。(史蹟の部參照)それは少くとも三千年以上、前のものであるといふ。

有史後の大阪の歴史は神武天皇の御東征から始まる。天皇がこの地にお出になつた時、河流と潮流のために、波が荒れてゐたので浪速(ナミハヤ)と仰せられた。それが次第に轉化して、浪速(ナニハ)、浪華、難波となつた。その當時、今の大阪市の地は大部分入海であつた。大和川は生駒山脈の西を流れて淀川に合してゐたのであるから極めて物淋しい河口の入江であつた。今大阪の豪商連の多く寄り集つてゐる區劃は東區船場(センバ)及び南區島内(シマノウチ)であるが、かゝる名前の附(ツ)けられてゐる所から察するとこれ等大阪市目貫(メヌキ)の地が昔は船着き場であつたことが推知される。從つて神武天皇の御船を着け給ふた白肩津(シラカタノツ)は生駒山脈の西麓に近い地であつただらう。淀川畔の牧方(ヒラカタ)がその地に當るといふ人もある。天皇はそこから御上陸遊ばされ、孔舍衛(クサカ)坂を經て、大和に擊(ウ)ち入らうとし給ふたのである。ところが、大和の登美(トミ)(奈良縣生駒郡富雄村附近)にゐた長髓彦(ナガスネヒコ)が防戰奮鬪したゝめ、天皇の軍不利となり、皇兄五瀬命は、この戰に流矢(ナガレヤ)に當つて重傷を負ひ給ふた。今生駒トンネルの西口に日下(クサカ)といふ村があるが、その地がその當時の戰場であつたのである。一説には當時の御順路は現今の暗峠(クラガリ)であるともいふ。天皇は東に進み入ることが出來なかつたから遂に進路を轉じて紀伊から大和に入らせ給ふた。

その後崇神・崇仁の御代に至り、大いに農業を奬勵し、依網池(ヨサミ)(依羅(ヨサミ)ともかく)、狹山(サヤマ)池、茅渟(チヌ)ノ池等の多くの池沼を掘らしめ、以て灌漑に便せしめられた。

その後、神功皇后は三韓を征伐して、浪速の地

に凱旋せられ、三韓より朝貢の船は、すべて難波の津に入り、彼の地の進歩したる文物・工藝は年を追つて傳來する樣になつたのである。

神功皇后の御子應仁天皇は都を難波の大隅の宮（大阪市東淀川區長柄の北）に定められた。この御代の初に、『攝津』の國號が國史に現はれてゐる。その意味は萬國の船舶が、此處に集るの意である。天皇は三韓との交通のため御遷都になつたのであらう。

次ぎに仁德天皇は、難波『高津宮』に都された。宮の位置は大阪城の附近である。天皇は、『高き屋に登りて見れば煙立つ、民のかまどはにぎはひにけり』の御製に、仁政の美談を殘し給ふのみならず、沼や澤を埋めて道路をつくり、河水を引いて西の海に入れ給ふた。これは今、天滿橋の架る大川で三韓朝貢の船も直ぐ、このお宮の下に着いたのである。またその御陵は大仙陵（史蹟の部參照）として有名である。

當時難波の地は歸化人の手に依つて工藝が盛んになつた。博士王仁の子孫は河內に、弓月君の後裔秦氏は攝津及び河內に住し、吳服の織女は攝津池田（豐能郡池田町）に住して、各々その中心地となつた。

推古天皇の御代になつて聖德太子は物部守屋征討の際、お立てになつた御誓願によつて、四天王寺（史蹟の部參照）を荒陵の地に建立せられた。そこに敬田院、悲田院等もお造りになつた。

第二章　中古期

孝德天皇は都を長柄の『豐崎宮』（大阪市東淀川區本庄町）に定められて、有名な大化の改新を行はせ給ひ、民の戶口を調査し、種々なる制度をつくられた。それ故難波の地は全く我が國文化の中心地となり、又海外交通の門戶になつたのである。遣唐使・留學生の派遣、海外賓客の往來の地は、何れもこの地が起點となつて、船舶の出入が絕ゆることがなかつたから、特に攝津職を設けて之に當らしめられた。大阪が今日のやうな盛大を致した遠い原因は、既にこの時から源が發してゐるのである。

【奈良朝時代】

奈良朝時代までも都は多く大和にあつたために大阪との交通は多く大和川の溪谷が重要なる交通路であつたから、大阪平野の東南部が主として發達したのである。そして淀川流域は土地が未だ低濕で重要な地帶とはならなかつた。聖武天皇は諸國に國分寺を營まれて佛敎全盛の時代を形成せられた。南河內郡國分村、泉北郡南池田村國分、大阪市舊生野村國分、大阪市舊豐崎町の地は當時國分寺のあつた所である。後、光仁天皇は、南河內郡道明寺字國府、泉北郡伯太村府中、大阪市天滿橋南詰（後に玉造）に各々國府を設け、內治に御心を注がせ給ふた。

【平安朝時代】

桓武天皇が山城に都をお遷しになつてからは、支那・朝鮮との交通上、淀川は目覺しい舟運路となつて、從來の大和川とその價値を轉倒するに至つた。然して、その後海外との交通漸く衰へ、遣唐使の廢止せられるに及んで難波の港は昔日の觀をなくしてしまつた。また江口の附近に堀江を造つて淀川の水を神崎川に落したのは桓武天皇の延曆四年であつた。それ以來京都から西國に行くには神崎川を下ることになつたから、難波の繁榮は江口、神崎、武庫の港に移り、大阪は只僅かに平安京の貴族其他のものが、天王寺・住吉や熊野・高野の參詣道として往來した位である。

第三章　近古期

【鎌倉時代】

朝廷の政權鎌倉幕府に移るに至つて、大阪の衰運益々甚しく、西行法師『津の國の浪速の春は夢なれや、葦のかれ葉に風渡るなり』などの歌から推察してその寂しさを窺ふことが出來る。

後醍醐天皇の御代、北條高時が叛したとき、楠正成（時に年三十八）は詔を奉じて河內に兵を起し、赤阪城（史蹟の部參照）に據つたが陷り、更に金剛山

に千早城（史蹟の部參照）を築いて、賊の大軍をなやましたが。やがて政權朝廷に歸し、正成は攝津・河内の守護に任ぜられた。程なく建武二年足利尊氏また叛し、新田義貞・名和長年と共に之を破つて、西國に走らせたが、幾ばくもなく、尊氏大軍を率ゐて攻め上るに及び、正成は櫻井驛（三島郡）（史蹟の部參照）に於て、わが子正行と訣別し、兵庫の湊川で戰死した。やがて尊氏は京都に還り、別に院（北朝）を立てた。後醍醐天皇は都を吉野に遷されたが、勤王の志士相次いで歿し、北畠顯家は阿部野（大阪市住吉區）（史蹟の部參照）に戰ひ、石津川（泉北郡）で戰死した。次いで、天皇も吉野に崩ぜられ、後村上天皇が御即位遊された。天皇は南河内郡の天野山金剛寺（史蹟の部參照）、觀心寺（史蹟の部參照）、に屢々行幸せられ、行宮とし給ふた。この時楠木正行は父の志をついで、屢々勤王の兵を擧げ、譽田（南河内）・住吉（大阪市）などで敵軍を破つた。正平三年正月五日高ノ師直と河内の四條畷（史蹟の部參照）に戰つた。その時官軍は僅かに六千人、賊軍の十分の一にも達せなかつた。正行は必死の勢で賊軍中に討入り、終に師直の本陣に迫つた。すると師直の家來上山高元は自ら『高ノ師直なり』と稱して戰死した。かくする內に官軍は殆んど討死にし、正行は弟正時と刺違へて斃れた。これより南風競はず、吉野朝廷の威勢益々下火となつた。

【室町時代】

遣唐使の廢止以來、兵庫の港も衰へ、吉野朝時代から戰國時代にかけて勃興したのは堺港である。堺は京都に代つて商工業の中心地となり、この地は近く京都・難波を控へて海に面し、交通の要地に當つて居たから內外の船舶・貨物常に集散してゐた。殊に市政は十人衆、會合衆（相談役）を設け、また歐洲の自由都市の如く自ら兵備を有し、獨特な自治制を布き、諸侯に左右せらるゝことなく、よく戰亂の渦中に卷込まれず、その繁榮と自由を樂むことが出來たのである。

土御門天皇の明應五年淨土眞宗の本願寺八世蓮如が石山の地に別院を創建した。その位置は今日の大阪城の附近で川岸に臨んでゐたと見ゐて、唐船などが着いたといふことである。彼の名高い蓮如上人の御文の中には『攝津生玉の庄內、大阪といふところは……』大阪といふ語が初めて出てゐる。この頃最早、大阪といつてゐたが、狐狸の出沒する物淋しい田舍であつたのである。

この本願寺は失火して全燒してしまつたので永祿八年、本願寺十一世の光佐が再建した。この時代の大阪は方八町位の門前町であつた。しかし漸次四方に擴がつて行つたのである。これが今日の大阪市の起りである。

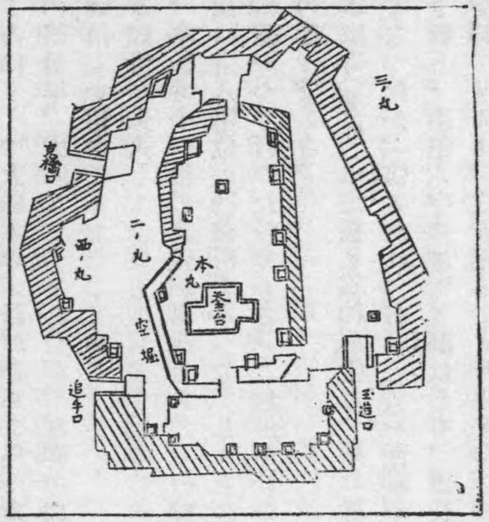
石山本願寺（光佐）は信長と不和を生じ、その攻むる所となつたが、『悔る勿れ、右府（信長）百萬の軍、拔き難し。南無六字の城』と謳はしめ、信長の威勢を以てするも、之を陷ることが出來なかつたことを想ふと石山の勢力も實に偉大なものがあつたと見へる。光佐と信長が戰つたが勝敗定まらず、天正八年正親町天皇の詔によつて、本願寺は寺を信長に渡して退城し紀伊に去つた。そこで信長は部將池田信輝をしてこゝに居らしめた。その後間もなく城中から火を發して宏壯なる城郭は、三晝夜も燒け續けたといふことである。

【豐臣時代】

天正十年織田信長は明智光秀のために弑せられ、豐臣秀吉は山崎（攝津）の戰に之を破つて主君の仇を復し、その後を繼ぎ、大阪に居る池田信輝を美濃に移し、天正十一年より舊石山本願寺の地に築城し始め、その城の光景は實に壯麗を極めたもので、高い石垣、深い水濠、巍然たる天守閣、その他幾多の樓閣・殿舍が落成するまでには、之に參與した西國諸大名三十餘侯に及んだ。實にこの大工事が二年の短日月にて完成されたことは驚くべき事である。元來秀吉は馬上で天下を取つた戰國の英雄の一人として壯大を好み、豪華を悅ぶの念が强かつた。彼が一生の大事業として築いた大阪城の壯麗無比であつたことも、彼が性格の一面を示してゐるものである。天主閣の內部は金箔で飾られ、人目爲に眩み、軒の瓦は總て金を貼り、

太閤桐の紋が旭日に輝く有樣は偉觀の極であつたらう。またその外側は黑く塗り、描くに鶴龜を以てした。天主閣の下には多くの殿舍があつた。千疊敷(千疊閣)と云ふ御殿は壯麗を極めたもので、太閤は、こゝで諸侯外人に接見したのである。

大阪城の外郭は城下町を包んだもので、その廣さは、東西凡そ二十町、南北十八町であつた。現今の大阪城址は豐臣時代の大阪城の本丸、西丸、二丸に當るもので、その外郭は、



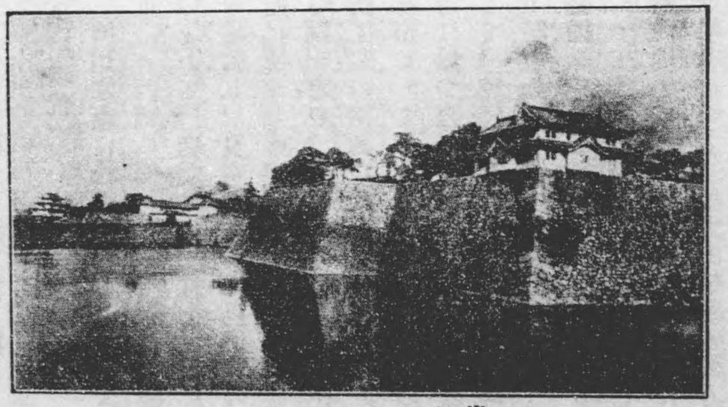
西は現今の東橫堀と南は空堀(カラホリ)通り附近の低地、東は猫間川附近の線、北は淀川、以上の內に含まれた地域に相當するのである。

秀吉がこの城を築いたのは、啻に難攻不落の堅城を誇るばかりでなく、この地が西國、四國の群雄を抑制するに適當な所で、且つかねての希望である海外雄飛の志を果す根據地として最も恰好な地であるからでもあつた。彼が建設した都市は今日大阪の心臟となつてゐる船場、島の內、天滿の方面で南北縱橫に造つた市街は非常に立派であつた。天滿堀、道頓堀、東橫堀、西橫堀等の開鑿も、この時に出來上つたものである。

また秀吉は堺の南北の堀を埋めて、大阪を延長し一都にする計畫があつたといふ。しかしその後堺の町人が大阪に移り、他の地方からも續々大阪に移住したので大阪の商業は益々盛んとなつた。諸大名の領地より出る米もこの地の藏に運んで賣買される樣になつた。實にこれより大阪は經濟上中心都會となつた。

當時大阪はすでに內國商業の大中心となつたばかりでなく、彼の御朱印船(商人・寺院の貿易許可船)も皆こゝに出入し、文祿の頃まで、外國貿易の中心地であつた。然に征韓の役も意の如くならず、『露と置き、露と消へぬる我が身かな、浪速のことは夢のまた夢』と、辭世の歌を殘して、秀吉ははかなく世を去つた。

秀吉の子秀賴は關ヶ原の戰後、僅かに攝・河・泉三國の一大名となり、それに引かへ家康の勢力は日增に盛大となり、圖らずも方廣寺の鐘銘事件から、秀賴の臣等之を憤つて兵を大阪に擧げた。關東の攻圍軍五十萬人、城兵十餘萬人、兩軍の兵士は要塞攻守の凡ゆる手段を盡して戰つたのである。望樓、土俵、鐵楯、坑道等の手段で犇(ヒシ)々と城に攻め寄せた。しかし大阪城の防備は極めて堅く遂に攻圍軍をして外郭(モト)の一部すらも占領することを許さなるつた。固より攻圍は慶長十九年十一月より十二月までの短期間であつたが、老獪なる家康は、徒に將士を損すること多きを憂へて遂に和を結び、その條件として外郭の濠を埋め、且つ二の丸の防備を撤することを約した。約成るや家康は十萬の軍卒を督勵して極めて迅速に外郭の濠を埋め、尙二の丸の濠をも破壞してしまつた。大阪方はその狡獪なる遣口に對して抗議をしたが時既に遲くこの金城湯池とも云ふべき大阪城の防備は奪はれ完全な防備の存するは本



—巍然たる大阪城—

丸のみとなつた。

翌元和元年五月大阪方は再び兵を擧げた。今度は城の防禦的價値が大部分失はれてゐたので、將士は多く城外に出て戰つて居た。しかし衆寡敵せず、猛將後藤基次は河内道明寺附近まで進出して戰死し、花の若武者木村重成は河内若江（史蹟の部參照）附近で壯烈な戰死を遂げた。やがて攻圍軍は防禦の薄い大阪城にひた〳〵と攻めよせ、籠城の勇將眞田幸村以下の目覺しい奮闘はこの時であつた。この時の戰は城塞戰ではなく野戰である。野戰となれば寡兵の大阪方が敗北するのは當然である。秀頼が金の千生瓢箪の馬標を押立てゝ自ら城外遙かに出馬したにも拘らず、頽勢如何とも致し難く、城内は燒け攻圍の將士は亂入した。その大混亂に際し講和の交渉もあつたが何の効もなく城主秀頼、その母淀君以下の人々は恨を呑んで自害し、かくて燃ゆ盛る焰と、悲しい男女の叫と、關東側の喊聲ともろともに大阪城は沒落したのである。

第四章　近世期

【德川時代】

德川家康は松平忠明（十萬石）を大阪城代となし、近畿・西國に備へしめ、戰後の經營に當らしめたのである。忠明はよく意を民政に用ひ、流離の民を招致し、又京町堀・江戸堀等の運河を鑿つて交通に便せしめ、三ノ丸を市街地とし、家屋を建て町制を定め、伏見から町人を移住せしめて、專ら商工業の勃興に意を用ひた。我が大阪市が商工業都市として、天下に名をなしたのは、恐らくこの時に始つたのである。爾來大阪は幕府直轄の地として、城代・奉行をして市制を司らしめ、他の城下町の如く、領主の抑壓がなかつたので、自由の發達をすることが出來たのである。

さて德川幕府は三都經營策として大阪を商人の勢力地とすることを拒まなかつた。凡そ人世に三大勢力がある。權力と榮譽と金力とである。この三つを併せ有することは人生の理想であるが、治

者の側から見ると一處にこの三大勢力を有するものがあつては治め難い。そこで德川氏は之を三都に分與した。江戸は旗本八萬騎の集る所として天下權力の府となつた。京都は一天萬乘の君の居ます所、公卿百官は榮譽此上もない。大阪は町人本位の府、才覺次第で素（モト）、丁稚でも百萬長者となる。大阪には權力もなく、榮譽もないが、然し日本の物價は大阪に定まる程の勢力があつたのである。特に關西の諸大名が爭ふて所謂藏屋敷を置くやうになつてから米穀類を始め、あらゆる物產は凡（スベ）て一度大阪の地に運ばれて大阪商人の手を通じて諸國に配布されるやうになり、大阪の商業は益々盛大となつた。それに德川時代の武士なるものは算數經濟に暗いのを誇りとする程であつたから藏屋敷の保管者は生き馬の眼を拔く大阪商人の自由に飜弄する所となつたのは云ふまでもない。こゝに大阪は金力萬能の都會となつたのに不思議はないのである。

さて當時府下の諸侯は岸和田の松平氏（六萬石）、後、岡部氏（五萬五千石）、高槻（タカツキ）の松平氏（二萬石）、後、永井氏（三萬六千石）、狹山（サヤマ）の北條氏（一萬石）、丹南の高木氏（一萬石）等の諸大名があつた。

（大塩の亂）

文政の初から天保の初にかけて凶作打續き、天保七年最も甚しく、之に乘じて、大阪には米の買占めをなすもの現はれ、米價騰貴して餓死するもの多く「打壞（ウチコワシ）」さへも起つた。このときに大阪に大塩平八郎なる者があつた。王陽明の學を學じ、その人となりを慕つて、夙に大儒の評を得たが町奉行に屬し、與力となつて功を擧げたこともあり才名が高かつた。彼はこの窮狀を見るに忍びず、自ら藏書を賣つて貧民を救ひ、金一朱づゝを一萬人に施與し、上書して、幕府の米穀を出し窮民を救濟せんことを請ふたが容られなかつたので、遂に同志を集め火を放つて富豪を襲ひ、大阪城代に迫つたが敗れて自殺した。彼は檄文を飛ばし「幕府が政權を私し、局に當るものゝ失政不仁のため天災地變相つぎ人民が離儀するのであるから、神武天皇の御政道の通り、寛仁大度の政治に立戻さうとするもので、天下國家を取らんとする慾心からではない」といつてゐる。

第五章　現代期

明治維新後廢藩置縣の際、大阪府、堺縣、河内縣等を置かれたが、明治二十年現今の大阪府とな

つた。そして本府の中心たる大阪市は商工業の發達につれて急速な發達をした。舊市を中心として四方に發展したが、何の計畫もなく、自然の膨脹に任せた結果、實に不体裁な都市となつてしまつた。近年當局者も悟る所があつて都市計畫が企劃せられ、既に着々その事業が進んでゐる。

さて明治維新以後、武力の世界は變じて實業の世界となつては、大阪は益々その使命に適合し、特に最近代の機械的大工業は大阪に於て最も發達し、昔は商賣人の都であつたものが、近來は工業をも併せて、人口は益々增加し東京市さへ凌ぐやうになつたのである。日清・日露の兩大戰役には敵國に近い關係上、東京・横濱よりも大阪・神戸が物資供給の便宜が多大であつた。前古未曾有の世界大戰にも大阪市は經濟的に華々しい活動を演じた。日清戰役には十萬圓臺の富豪が大阪に澤山出來、日露戰役には百萬圓臺の長者が多く出來た。世界大戰には一桁上つて千萬圓臺の長者が續出したのである。無論大正九年の財界恐慌(キヨウコウ)(大あらし)には大阪附近の「俄か長者」のみならず、太閤樣以來の由緒ある老舗(シニセ)すら大打擊を受けたが、然し日本將來の貿易上の大飛躍が是非とも支那・印度・南洋方面に於て演ぜねばならぬことを想ふ時、大阪は實業の地としての發展は前途洋々たるものがあるであらう。

廣瀨淡窓

城郭影浮(ナ)春浦月　絃歌聲隱(トシテ)暮洲煙

昇平有象君看取　處々柳陰繫賈船(ヲ)

第二編　大阪府の史蹟

第一章　大阪市の史蹟

四天王寺　所在地、市電天王寺西門停留所前
—宗派、天臺宗—本尊、如意輪觀世音—

用明天皇の御代、聖德太子は物部守屋を滅すために御願に四天王像を戴いて勝利を祈られ、若し佛の御力によつて勝つことが出來たら、四天王の爲に寺を建てやうと御誓ひ遊ばされたが、その結果太子方の勝利となつたので、用明天皇の二年に四天王寺を今の玉造の附近に建てられた。のち推古天皇の元年(約一千三百四十年前)、太子は更に現在の地に寺を建立せられた。これが我國最初の佛寺建築である。その後、數度の火災のため創立當時の建物は全く殘つてゐないが、建物の配置は依然として當初の形式そのまゝで法隆寺と共に百濟樣(クダラヤウ)といはれる我國寺院の中一番古い伽藍の形式を殘してゐる。

四天王寺は中世以前は八宗兼學であつたが、淳(ジユン)和天皇の御代(約一千百年前)から天臺宗を奉ずる樣に命ぜられた。廣い境内には何時も參詣者の絶え間がない。鎌倉時代に建てた石の鳥居、文化年間(約百三十年前)に建てた五重の塔、本尊を安置する金堂、山内唯一の特別保護建造物である東大門(桃山時代の作品)、世界一の巨鐘と言はれる大鐘等をはじめとして天王寺の堂宇は約八十もある。

石山本願寺　略史の部　五頁參照

大阪城　〃　〃

高津神社　所在地、南區高津一番丁
—社格、府社—祭神、仁德天皇—

清和天皇の貞觀八年(約一千六十年前)の創建で、もとは大阪城の邊にあつたが、秀吉の築城にあたつて、今の地に遷座した。今の建築は承應二年(約二百八十年前)の造營である。仁德天皇の外に仲哀天皇、應神天皇、神功皇后などをも合祀し奉る。

難波の津　略史の部　二頁參照

高津の宮　〃　〃

長柄の豊崎宮　略史の部　二頁參照

生國魂神社　所在地、天王寺區生玉町（下寺町停留場東南）
—社格、官幣大社—祭神、生國魂大神・咲國魂大神（共に伊弉諾尊・伊弉冊尊の御子）—

古來よりの大社で一に難波大社ともいふ。神武天皇が始め御東征の時、難波の津にお着きになり高津の丘（今の大阪城のあたり）に兩大神を祀られしを始めとする。應神天皇の時始めて神宮を造營せられ、幾多の變遷を經て秀吉また立派な社殿を造つたが明治四十五年の大火にまた烏有に歸した。現在の建物は大正三年の造營である。

天滿宮　所在地、北區大工町（市電鳴尾町停留場東）
—社格、府社—祭神、菅原道眞—

この附近は孝德天皇の御宇、長柄豊崎宮（二頁參照）の王城鎭護のために大將軍を奉祀せられた大將軍の森といふ神地であつたが、村上天皇の御代に社殿を創建し、天滿宮を勸請せられてから一層世の崇敬が加はつた。その後、度々火災を受けたが、明治三十四年に至つて大修築を加へ現在の建物が出來上つた。毎年七月二十五日に行はるゝ鉾流しの大祭には、今も神輿は船で淀川を下り御旅所に渡御の式が行はれ、陸も水も全く人と舟とを以て滿たされ、その殷賑は天下稀に見る盛觀で、世人はこれを天神祭と呼んでゐる。

住吉神社　所在地、南海濱寺線住吉神社前停留所
—社格、官幣大社—祭神、上筒男命・中筒男命・底筒男命、神功皇后—

三韓征伐の時、住吉の三神が現はれて皇軍を護られたといふので、凱旋ののち、神敎のまゝに之を攝津國莵原郡（今の武庫郡）住吉郷に軍神として祀られた。これが本住吉で、仁德天皇は高津の宮に都を遷されると、墨江の津を船舶發着の津頭と定め、こゝに住吉神を移し、祀つて航行船舶の守護神とせられた。これが現在の攝津一の宮たる官幣大社住吉神社である。歷代朝廷の御尊崇は極めて厚く、又軍神として、歌神として、船舶の守護神として國民の尊敬が最も深い。社殿は我國古代神社建築樣式である所謂住吉造で、特別保護建造物

に數へられ、昔、航海者に針路を示したといふ高燈籠や、長さ十一間を有する半圓形の木で造つた反橋と共に名高い。

阿部野神社　所在地、南海上町線北畠停留所西
—社格、別格官幣社—祭神、北畠親房、同顯家—

建武三年三月顯家が奥羽の兵を率ゐて來り、賊軍足利の兵と戰つた古戰場であるから、明治十五年これを創建し、誠忠無二の精靈をこゝに祀られ、永く天下の師表とせられた。

第二章　攝津國の史蹟

勝尾寺　所在地、三島郡豊川村粟生（箕面瀧から凡四里）
—宗派、眞言宗—本尊、十一面觀音—

聖武天皇の神龜年間（約千二百年前）の創建で清和天皇の時始めて勝尾寺の名を賜はつた。西國巡禮第二十三番の札所で、歷代皇室を始め武將の崇敬が極めて厚く、壽永年中一谷の戰の時兵火にかゝり堂宇六十八宇が悉く烏有に歸した。その後源頼朝がこれを再營し、慶長年中豊臣秀頼が修補したのが現在の堂宇である。

櫻井驛址　所在地、三島郡島本村櫻井

楠公父子の訣別せし所として有名で、延元々年足利尊氏が、大擧して九州より上洛せんとしたので、正成は新田義貞と共に命を奉じて湊川に向つたが、其の身の最後の合戰であることを知つたので、その子正行を坂口八幡社（同村にある）に呼び寄せ、『成年の後は一族を集めて逆賊を滅ぼし天皇の御心を安じ奉る樣に』との遺訓を殘し、互に訣別して出發した。正成がその當時、旗を懸けたといふ子別の松（一名旗立松）は今も尙枯木となつて殘つてゐる。乃木將軍染筆の記念碑がある。

水無瀨神社　所在地、三島郡島本村廣瀨
—社格、官幣中社—祭神、後鳥羽・土御門・順德三上皇—

この地は後鳥羽天皇が御殿を造營し、屢々行幸あらせられた所である。承久の亂後、畏れ多くも義時は三上皇を遠島にお遷し申したが、後鳥羽天皇は崩御の十四日前に、この地の住人水無瀨信成に御置文を遺はされたので、四條天皇の仁治元年

（約六百九十年前）この水無瀬殿の舊地に聖廟を營み御影を安置したのが當社の初めである。明治六年官幣中社に列し、三上皇の靈を奉迎して安置した。

瀧安寺 所在地、豐能郡箕面村
—宗派、天台宗—本尊、辨財天—

孝德天皇白雉元年（約千二百八十年前）役小角の創建で、本尊は小角の作と傳へられ江の島・竹生島・嚴島の辨財天と共に『四ヶ所の辨天』の稱がある。

第三章　河内國の史蹟

四條畷神社 所在地、北河内郡甲可村南野（四條畷驛東）
—社格、別格官幣社—祭神、楠木正行及その一族—

飯盛山下、忠臣正行公戰歿の地に墓が建てられてあつたから、明治二十二年に正行を主神とし、弟正時及和田賢秀（ケンシウ）等二十四人を合祀したる本社を創建した。

（註）四條畷戰……略史の部・四頁參照
飯盛山……飯盛城址、建武元年の北條氏餘黨の根據地、永祿年中三好長慶の根據地
和田賢秀の墓……高さ五尺、天保二年に建立

楠木正行の墓……小楠公戰歿の地、時の人、塚上に一木を植ゑ、標石に「南無權現」とほつて忠魂を慰め、世々楠塚と稱し來たが明治十年こゝに一大碑を建てた。

木村重成の墓 所在地、中河内郡西郡村北辻（若江停留所南）

この附近は大阪夏陣の時若江の戰のあつた所で徳川方の勇將を向ふに廻して、大阪方の若武者木村重成が井伊の先頭を破り山口重信を殪（タホ）して奮戰したが遂に衆寡敵せずこゝに討死した。墓はその忠貞を賞して家康の築いたものである。里人は此墓のある所を無念塚と呼んでゐる。

枚岡神社 所在地、中河内郡枚岡村出雲井
—社格、官幣大社—祭神、天兒屋根命（第一殿）比賣（ヒメ）神（第二殿）鹿島神（第三殿）香取神（第四殿）

神武天皇の即位前三年、天種子命が天皇の勅命によつて山頂の平坦なる所に鎮座したものが當社の起源で、山腹なる今の地に遷座したのは孝德天皇の御代である。歷代の皇室並びに武人の御尊崇が厚く、寶物もまた非常に多い。又當社のお粥の神事は他に類例のないお祭である。

藤井寺 所在地、南河内郡藤井寺村（藤井寺驛南）

—宗派、眞言宗—本尊、千手千眼觀音—

聖武天皇の勅願によつて創建せられ、平城天皇の時、在原業平が勅命によつて修築した。歷代朝廷の尊信篤く立派な伽藍があつたが、その後震災で全く倒壞した。現在の堂宇は秀頼の修理したものである。西國巡禮第五番の札所として名高い。

參るよりたのみをかくる藤井寺、はなのうてなに紫の雲

聖武天皇御寄附の紫雲燈籠を始め寶物が多い。

野中寺 所在地、南河内郡埴生村野々上（古市驛西）
—宗派、眞言宗—本尊、藥師如來—

叡福寺の「上の太子」勝軍寺の「下の太子」に對して「中の太子」とも稱せられてゐる。聖德太子の開基せられた四十六院の一で、七堂伽藍を有せる立派なものであつたが、南北時代の戰亂に烏有に歸し、現在の堂宇は享保以後（約二百餘年前）のものである。境内には法隆寺式配置の礎石がある。鳥佛師の作たる木造地藏菩薩（國寶）を始め寶物が多い。

應神天皇御陵 所在地、南河内郡古市町譽田（御陵前驛南）

仁德天皇の大仙陵に次ぐ日本第二の大御陵で、陵墓地面積七萬餘坪、周圍は約千二百間ある（一九頁參照）。陵は前方後圓三段山作で濠の外側に中堤を築き老松が之を蔽ふてゐる。もとは二重濠であつたが、外濠は元治元年大修築の折、民有に歸して田畑となつた。附近には八つの陪塚（バイテウ）がある。

譽田（ホンダ）八幡宮 所在地、南河内郡古市町譽田
—社格、府社—祭神、應神天皇・仲哀天皇・神功皇后・住吉三神等—

欽明天皇の御代はじめて、御陵前に宮殿を造り應神天皇等を祀られ、後冷泉天皇の時、南一町ばかりの現在の地に移された。のち屢々火災にかゝつたが、慶長十一年秀頼の再營によつて現在の神殿、拜殿等が出來た。境内には朝鮮王寄進の石燈籠をはじめ燈籠が多い。

道明寺、天滿宮 所在地、南河内郡道明寺村道明寺
—宗派、眞言宗（ハジデラ）—本尊、十一面觀音

一名土師寺と稱し尼寺である。始め野見宿彌（菅原氏の先祖）が埴輪を作つた功によつて此地を賜はつたが、敏達天皇の時その裔たる土師氏がこゝに氏寺を創建した。延喜の頃、道眞の叔母、覺壽（カクジュ）

尼の入寺によつて尼寺となつた。道眞の左遷の時こゝに來て別を告げ自巳の影像を刻して記念に殘して去つた。

道眞の薨後、村上天皇の御代（凡九百六十年前）この境内に天滿宮を建立した。これが道明寺天滿宮である。明治五年寺社分離を命ぜられてから道明寺を現在の地に移した。天滿宮の寶庫には道眞に關する寶物が多い。

玉手山の横穴と石棺　所在地、南河内郡玉手村

玉手山の下部、南側に九つ、北側に六つの穴居の遺跡の如きものがある。昔から古代民族の穴居の跡だと言ひ傳へられてゐたが、近年その奥から有名な陶棺を發掘した。破損してゐるが右側の横穴に二個まで作りかけのものがあることによつてこれが古墳の跡であることが明かになつた。從つて今まで穴居の穴だといはれてゐたものは、全くその羨道（センダウ）だといふことが明かにされた。これらの横穴は大小不同であるけれども、天井には曲線及直線より成つてゐる古代式の單純な模樣を彫刻してゐる。石棺は大正八年にこの附近の古墳から發掘されたものである。石棺の蓋の多くは屋根形をしてゐるものだが玉手山の安福寺境内にあるものは、その形が竹筒を二つに割つた樣に蓋（フタ）と身とが全く同じ形で舟形をしてゐる。その外側には精巧（チヨウ）な古代模樣の彫刻が施してある。現在その蓋は手洗鉢（ズバチ）に代用せられてゐる、長さ八尺四寸幅は二尺六寸ある。

石器時代の遺跡地　所在地、南河内郡道明寺村國府

この地はもと國府であつたので國府の址が殘つてゐるが、その東方の畑地は古來より骨地と呼んで石器時代の遺跡地である。古代の人骨、石器、裝飾具等が發掘せられて、人類學、考古學上に有力なる材料とせられてゐる。

觀福寺　所在地、南河内郡磯長村太子

―宗派、眞言宗―本尊、如意輪觀音―

俗に上の太子といひ（野中寺參照）推古天皇が聖德太子の御墓の守護として坊舍を建てられたのが、その起源で（凡一千三百年前）聖武天皇の御代勅願によつて、南都法隆寺にも匹敵する樣な大寺院になつた。その後種々の變遷があつたが尚、壯觀たるを失はない。卽ち、當山には仁王像（運慶の作と傳へらる）を安置せる中門、釋迦を始め四体の像を安置せる多寶塔、鳥佛師の作と傳へられる如意輪觀音（本尊）や、弘法大師の作と傳へられる脇士等を安置せる金堂　聖德太子等身像（丈五尺一寸、十六歲の御時の像）を安置せる太子堂（秀賴の再建したもの）等有名なる建物が多い。

下赤阪城址　所在地、南河内郡赤阪村森屋東

元弘元年正成が始めて勤王の兵を擧げた所で金剛山の支脉の一端にあつて高さ約五十尺、東西約百間、南北約四百間、今も尚、本丸、二の丸、三の丸等の址が殘つてゐる。正成は笠置が若し危くなつたら後醍醐天皇をこゝへお迎へしやうとして急いで築いたものである。のち衆寡敵せずして一旦陷つたが、その後正成及びその子孫が度々この地を根據とした。

上赤阪城址　所在地、南河内郡赤阪村桐山

金剛山西側の連峰の一つにあつて、正成が元弘二年再擧に際して築いた城で、今は本丸の外に二の丸、出丸等の址だけ殘つてゐる。

建水分神社（タケミクマリ）　所在地、南河内郡赤阪村水分

―社格、府社―祭神、天水分神、天御中主神、國水分神等―

崇神天皇が農事を勸められし時、こゝに水神として水分神を創祀せられた。故に歷代皇室の尊崇が極めて厚い。現今の社殿は正成が後醍醐天皇の勅命によつて山下なる今の「下の宮」からこゝに移し建てたもので、美術工藝上の模範として、特別保護建造物に指定されてゐる。當社は楠氏の產土神としてその關係深き遺物が澤山ある。

金剛山

大和・河内の國境に跨る府下第一の高峰で海拔一一一二米ある。元弘元年下赤阪城陷落の後、正成は護良親王を奉じて一時この山中に隱れ、千早城が出來て後は正季をしてこれに據らしめ千早城背面の防禦にあたらせた。往昔は頂上に金剛山寺の堂塔が建ち並んでゐて、眞に修驗者の道場であ

つた。今は葛城襲津彦を祀れる葛城神社がある。

千早城址

楠木正成が元弘三年北條氏百萬の大軍を惱した有名な城で、金剛山の西腹千早村にある。この城は百六十間平方位の小城であるが、四方の溪谷が削つた樣になつてゐて守るには最も都合よく、而も天下無双の智謀者正成が自然の地形を最も巧に利用し、赤阪城を玄關口として凡そ十七ケ所の出城を構へ、元弘三年二月吉野・赤阪の陷落後、雲霞の如く攻め寄せた賊軍を散々惱した所である。この爲に勤王軍は四方に起つて遂に北條氏は滅亡した。

觀心寺 所在地、南河内郡川上村寺元

—宗派、眞言宗—本尊、七星如意輪觀音—

文武天皇の大寶年中（約千二百年前）役小角の創建で、その後弘法大師が唐より歸朝の後こゝに住し本尊の七星如意輪觀音を自ら刻んで寺號を觀心寺と改めた。寺は歷代朝廷の御歸信が厚く殊に後醍醐天皇は正成をして金堂の修理を營ましめられた。正平十四年後村上天皇は當寺内に行宮を定められ住吉に崩ぜられて後は御遺詔によつて當寺境内に葬り奉つた。その後衰へたが秀頼の歸依によつて舊觀に復することが出來た。

金堂は觀心寺樣建築の典型で特別保護建造物で本尊を安置し、正成の建かけの塔、南蠻鐵の燈籠、大楠公の首塚、後村上天皇の御陵、及び行宮の趾等がある。

金剛寺 所在地、南河内郡天野村

—宗派、眞言宗—本尊、大日如來—

聖武天皇の勅願によつて行基の創立したものでその後衰へたが、後白河天皇の勅願によつて再び金堂を始め三十有餘の堂宇、七十の坊舍が完備し後村上天皇は正平九年より六年間の行宮と定められた。豊臣・德川二氏亦度々修築を加へ樓門・金堂・觀月亭（以上特別保護建造物）、食堂など今なほ立派な建物が多い。

延命寺 所在地、南河内郡川上村鬼住

—宗派、眞言宗—本尊、如意輪觀音—

僧空海の創立したものだが永らく廢絶してゐたのを延寶五年（約二百五十年前）に至り再興したもので爾來碩德高僧が相ついで當山に入り宗風をあげ法燈を傳へて今日に及んでゐる。

楠妣庵 所在地、南河内郡東條村甘南備

庵は大楠公夫人の隱棲終焉の所で大正二年始めて堂宇を建立せられ墓碑を建設せられた。

第四章　和泉國の部

大仙陵 所在地、泉北郡舳松村

仁德天皇の御陵で山陵中最大のものである。前方後圓式で、三段に築き上げ、その前後の徑は二百六十九間、後圓の徑は百三十六間、前方形の巾は百六十八間、高さは前方後圓とも百十餘尺、三重の濠を巡らし内濠は最も深く、巾狹い所で三十五間、廣い所では六十四間ある。周圍には十數個の陪塚があり、敷地總面積實に十四萬坪、一名百舌鳥耳原中陵ともいふ。

妙國寺 所在地、堺市材木町東三丁

—宗派、日蓮宗—

永祿五年の創建であるが大阪落城の時火災に罹り、現在の本堂は寛永四年（約三百年前）の建立である。庭内には大蘇鐵がある。凡そ四百年前の古木で幹長十八尺、方二十尺に達し大枝が三十二本ある。明治元年堺の警備を命ぜられてゐた土佐藩士が佛國水兵を射擊して十三人を仆し、遂に政府より罪せられて割腹した跡もこの境内にある（妙國寺事件）。

大安寺 所在地、堺市少林寺町

—宗派、臨濟宗—本尊、釋迦牟尼佛—

應永元年（約五百二十年前）德秀禪師の開基で一國寺と稱したが、天正元年火災に罹り、同二年（約三百五十年前）豪商、魚屋助左門の邸宅に移築し寺名を大安寺と改稱した。

方丈（住職の居る所）は魚屋助左門の邸宅を移したもので結構壯麗を極めてゐる。この方丈内にある鶴の畫枝添の松は當寺に禪學修業のために滯在してゐた狩野永德（桃山時代の有名な畫家）の描いたもの

で、西湖の圖は古法眼元信（狩野派の元祖）の筆である。

大鳥神社　所在地、泉北郡鳳村大鳥
—社格、官幣大社—祭神、日本武尊—

日本武尊が御東征の御歸途、伊勢國能褒野で薨ぜられたので、景行天皇は深く之を惜み給ひ同地に厚く葬られたが、尊はのち白鳥と化して能褒野の陵を出で、大和を經て更に河内に飛び、最後に此地に留まられたから、此處に宮を建てゝ尊を祀ることゝなつたと傳へられてゐる。社殿は我國古代神社建築樣式として有名な大鳥造で特別保護建造物となつてゐたが、明治三十八年火災のため全部燒失したので同四十二年再築せられた。

久米田寺　所在地、泉南郡八木村池尻
—宗派、眞言宗—本尊、釋迦牟尼佛・普賢菩薩・文殊菩薩—

僧行基が府下第一の大池、久米田池を穿ち功なり、願を滿した爲に開創されたもので、いはゆる四十九院の一である。一時は全泉州の三分の一を所領とし繁盛を極めた。後、全く頽廢せんとしたが、弘安五年後宇多天皇の御宇、勅願所となつてから再び榮ゑ、南朝のため大いに活動を續けた。永祿年間兵火にかゝり約百年を經て再興、寶曆年間及大正の中頃修理され稍々舊觀に復した。寺寶には楠家文書、久米田寺文書等の國寶を始め書畫、佛像などが頗る多い。

—終—

319
502

昭和四年三月十日印刷
昭和四年三月廿五日發行（非賣品）
大阪府立住吉中學校
編輯兼發行　歷史地趣味の會
大阪市北區芝田町三六
印刷人　尙文堂　高橋貞二
電話北二四〇三

終